

紅の喪章

デルフィニア戦記
14

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地	タイトルロゴ・マークデザイン	カバーデザイン	挿	口	カバーイラスト
図	水野デザインルーム	しいばみつお	画	絵	沖 麻実也
	斎藤由加	(伸童舎)			

目次

1	—————	9
2	—————	20
3	—————	50
4	—————	70
5	—————	97
6	—————	135
7	—————	138
8	—————	156
9	—————	177
10	—————	193
あとがき	—————	217



ラティーナ・ペス (エンドーヴァー) ◎子爵夫人。ウォルの元・愛妾。
ナシアスと恋仲。

ジル◎ベノアの頭目。イヴンを高く評価している。

ベネッサ◎ロムの女頭目。

アビー◎ベネッサの娘。

ポーラ・ダルシニ◎小貴族の娘。ウォルの愛妾。

オルテス◎サンセベリア国王。デルフィニアに密かに庇護を求めている。

リリア◎サンセベリア王妃。

ダルトン◎オルテスの信頼する部下。

オーロン◎パラスト国王。

ゲスケル◎オーロンの忠臣。

ゾラタス◎タンガ国王。

ヴァンツァー◎ファロット一族。

レティシア◎ファロット一族。

ファロット伯爵◎北の大国スケニアの重臣。暗殺集団ファロット一族の長。

ルウ (ルーファセルミィ・ラーデン) ◎ラー一族。リィの相棒。

CAST

ウォル (ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン) ◎デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

リイ (グリンディエタ・ラーデン) ◎異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。

シェラ◎リイ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。

バルロ◎国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。ロザモンドと結婚、2児の父になる。

イヴン◎独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの東峰にあるベノアの副頭目。

ナシアス◎ラモナ騎士団長。バルロの友人。

ドラ◎将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

シャーミアン◎ドラの嫡子。女騎士。

ブルクス◎宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

カリン◎女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。

ロザモンド◎ベルミンスター公爵家当主。バルロと結婚。

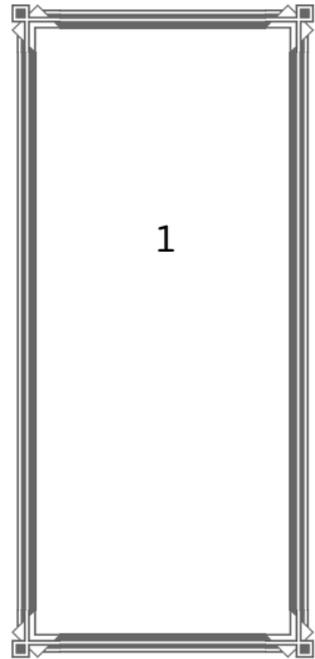
アベルドルン大陸図



紅の喪章

デルフィニア戦記 14

RECORD OF THE
Pelagian Wars



「これはどうする？」

ヴァンツァーがいやそうに尋ねたのは、目の前に置かれたアイクの生首だった。

「捨てちまえば？ みんなに見てもらおうと思つて運んできたけど、もう用はねえしよ」

レティシアがあつさりと言う。

その死を悼むでもなく、哀惜の念を抱くでもない。

彼は万事においてそうだった。何に対しても強い感情を抱くことがないのだ。

小者が呼ばれる。無論、事情を知っているものだ。言いつけられた通りに、黙々と、アイクの首を片づけていったが、ヴァンツァーを含む仲間たちは、いささか複雑な思いでそれを見送った。

誰がああなつてもおかしくなかったのだ。

特に、一緒にアランナの暗殺に赴き、命からがら逃げ帰ってきたスキヤップは、紫色に変じたままの唇を震わせて、レティシアを非難したのである。

「……あんたは、こうなるのがわかつて、わざと俺たちを行かせたんじゃないのか」

自分たちが暗殺という仕事のためだけに存在している道具であることは百も承知だ。道具である以上、目的遂行のために使われるのも当たり前だ。しかし、こんな使われ方は納得できない。

この男は、あの王妃が人を襲い、食い殺す猛獣であることを知っていた。

アランナの周りに王妃が眼を光らせていることも、襲撃すれば、王妃が黙っているはずがないことも、

知っていて黙っていた。

「やり方が汚えよ。あんた、最初から俺たちを餌えまに使うつもりだったんだらう」

それも文字通りの『餌』だ。

自分たちを王妃に『食わせて』おいて、この男はその隙を狙うつもりだったのだ。

この非難に対し、レティシアはいかにも心外だと、猫のような眼をさらに大きく見開いたのである。

「俺はやめておいたほうがいいって言ったはずだぜ。それを無視して飛び出していったのはお前たちじゃなかったっけ？」

「ふざけるなよ！ アイクとキンブルが死んだのも、あんたが何も言わなかったせいだぞ！ 聞いてりゃ、なんだよ、弱いものを見捨てられない習性だつて？ そんなこと一言も言わなかったじゃねえか！」

激情に声を震わせながらも、腰が砕くだけている。

彼にもようやくわかったのだ。華奢まがで非力ひりきそうに見えるこの男が、厄介やっかいな持病を抱えているにも拘わ

らず、なぜ、皆から一目置かれているのか。

この男は、自分とアイクの生首を抱えて、軽々と飛んで走った。この細い身体のごくに、こんな力があつたのかと思うほどの筋力であり、敏捷びんしょうさだつた。

人を噛み殺したばかりの、口元から毒々しい血を滴したたらせている王妃と楽しげに言葉を交わし、わざわざ持ち帰ったアイクの生首を、熱心に、興味深げに眺めていた。

心底ぞつとした。

これはもう、鍛錬たんれんによって磨く技倆の優劣を通り越している。冷酷とか無関心とかいうのとも違う。

身体と、心をつくっている要素が、自分たちとはまったく異なっているとしか思えない。

「あの王妃はもともとあんたの獲物なんだらう!? だったらあんたが一人でやりゃあいい！ 化け物同士でお似合いだらうさ！」

商人ふうの男が口を挟んだ。

「やめろ、スキヤップ。レティシアは行かないようにと、お前たちに忠告した。それはここにいる全員が聞いたことだ」

「そうそう、あの時のお前たちの鼻息の荒さじゃ、誰が何を言つたつて無駄だつて」

すかさず相槌あいづちを打つたレティシアだが、商人は、その彼をもたしなめた。

「レティー。お前もだ。我々は一時的に手を結んだ関係だが、目的は同じはずだ。その間で、隠し事は感心しない」

レティシアはその細い肩をすくめた。

「隠し事つてのはどういふことだい。手に負えない化けもんだつてことも、獣けだもんだつてことも、最初にちゃんと話したじゃねえか」

今度は初老の執事が言う。

「その上で、お前の意見を聞きたい。スキヤップも今度は素直に耳を傾けるだろうからな」

この執事の名はミンス。商人の名はジョスラン。

どちらも『それと知られた』達人である。

もう一人、さえない風貌の一兵卒はガスパー。

彼もまた腕達者ぞろいの一族の中で、抜きんでた

『芸』を誇る刺客の一人だ。

そのガスパーは難しい顔で腕を組んでいる。

「戦場で狙う。そこまではいいとして、肝心の戦いくさが起こる当てはあるのか。あまり余裕はないんだぞ」

ミンスもジョスランも考え込んだ。ヴァンツアーも懐疑的な顔になった。

約束の期限まであと約一年。

大国デルフィニアが手こずるほどの相手となるとタンガカパラストのどちらかしかない。そしてその両国とデルフィニアは、曲がりなりにも和平条約を交わし、つい先日、国交回復記念式典という席まで設けている。

ゾラタスもオーロンも馬鹿ではない。虎視眈々こしたんたんとデルフィニアを、タウの金銀を狙っていることに、今も変わりはない。

だからこそ、次に仕掛けることがあるとしたら、確実に勝てるだけの準備と保証を整えてからにするはずである。

そして、そんな大きな動きは、どんなに隠しても隠し通せるものではないのだ。必ず世間に洩れる。

今のところ、両国にそんな気配はみじんもなく、こやかに式典の招待に応じてきた。当分、一戦交えるつもりはないのだと判断するのが妥当である。

しかし、それでは間に合わない。

なんとしてもこの一年の間に、両国どちらかとの間に戦火を起ささせなければならぬ。

それも、王妃の出陣を要するほどの大戦おおいぐまをだ。

すっかり考え込んでしまった仲間たちを後目に、レティシアは実に楽しそうに言った。

「なあに、来年の春になれば、向こうが勝手にやらかしてくれるさ。予定じゃ、今年の春には事を起こしてはるはずだったんだ。北のほうの準備が追いつかないってんで、見送りにしただけでさ。まずゾラタ

スがスケニアと組んで、陸と海から一気に攻める。デルフィニアの意識が完全に東と海上に向いたところを、オーロンが背中から突くって寸法さ。まあ、方法自体は、去年タンガとパラストが組んだときと変わらない。つまんねえくらい古典的だが、これは案外、効果的だと思うぜ。単純に計算しても、敵がばらばらに三方から来るんなら、どうしたって手持ちの戦力を分けてそれぞれの方面へ向かわせなきゃならない。デルフィニアは三分の一ずつの兵力で、タンガ、パラスト、スケニアを相手にしなきゃならないわけだ。苦戦も苦戦、大苦戦するだろうぜ。このことをデルフィニアがまだ知らないとあっちゃやあ、なおさらだ。あの王妃さんも、どうでもみずから出陣しなけりゃならぬだろうよ」

全員の眼がレティシアに集まった。

スキヤップが、おっかなびつくり尋ねる。

「ほんとかよ。そんな話、聞いたことないぞ」

「そりゃあそうさ。極秘だからな。けど、絶対確実、

間違いなしの話だぜ。何しろゾラタスとオーロンが直に言い交わしてたそうだからな」

みんなの顔色が変わった。特にスキヤップは眼と口をまん丸にして、そんな情報をどこでつかんだと言いかけて、やめた。

答えは一つしかないからだ。

ヴァンツァアの顔に隠しきれない嫌悪が現れる。

ガスパーは露骨ろこつにいやな顔をし、ジョスランは沈黙し、そしてミンスは深いため息をついた。

「なるほどな。お前は彼らと自在に交信ができるという話だった」

「あっちが勝手に出てきてしゃべっていくんだよ。

よっぼど退屈してるらしいや」

頬杖ほおつえをついて笑いながら、レティシアはきらりと眼を光らせた。

「だけど、なかなかおもしろい手だと思わないか？ まさかあの二国が性懲りしょうこもなく、しかもこんなに早く手を組むなんて、さすがにあの王妃さんも王様

も思っていないはずだ。しかも今度はスケニアまで一枚噛んでる。欲に目のくらんだ超大国が死にもぐりいになって三方からデルフイニアを攻撃するわけだ。こりゃあ、いくら稀代の英雄きだいでも、現世に舞い降りた戦女神いくさめがみでも、ちよつとばかり難儀すると思うぜ」

「そこを我々が突くわけか」

「そういうこと。これで殺れなかつたら、さすがに一族の看板を下ろさなきゃならないだろうよ」

さらりと言うレティシアの眼の奥には冷たい炎が燃えている。

彼は心からあの王妃の手強さを楽しんでいた。

同時に、その手強い相手を自分の手で倒すことを、とどめを刺すときが訪れるのを、焦れたいほどに待ち望んでもいた。

最年長者のミンスが頷いて、言う。

「わかった。では、一時解散だ」

ジョスランも頷いて後を受ける。

「行動開始は来年の春だな。ガスパーはどうする。今のうちにデルフィニア軍に潜り込むか？」

戦が近くなれば兵隊を募るに決まっている。それに応じて内部の情報を集めるか、という意味だが、ガスパーは首を振った。苦笑しているようだった。

「行き先が違うぞ。下手に入隊して、行動を制限されたら何にもならない。まず、下っ端の兵士たちがたむろする酒場にでも顔を出してみる。そのほうが情報を集めやすい」

「待てよ。そんなことしなくたって……」

スキャップが不満そうな眼をレティシアに向けた。この男は『自由意志で動く聖霊』と話ができる。

彼らはまさに神出鬼没だ。その眼はどんな密室の中だろうと見通し、その耳はどんな秘密の会合だろうと聞き漏らしはしない。

これを利用しない手はない。一つ飛びして探つてもらえばいいではないか。

そう言いたげなスキャップに対し、レティシアは

甘つたるいくらいの猫なで声で言ったものだ。

「あんな、連中はいつでも出てきてくれるわけじゃねえの。女じゃねえんだから『来いよ』って言ってひよいひよい来るようなもんじゃねえの。だいたい、これは俺たちの仕事でしょうが。人間、楽することばかり覚えると、ろくなことにならないんだぜ。自分の仕事は、ちゃんと汗を流して片づけなきゃあ、お天道様てんさまに申し訳がないですよ」

その、人を食ったような物言いに、スキャップはかっとなつた。

「怠けてるのはあんたのほうだ！ あんたがもつと早くあの王妃を片づけてりゃ、こんなことにはならなかつたんだ！ この間だつてそうじゃないか！ 機会はいくらでもあつたつてのに、見合いよろしく仲良くしゃべってばかりとはどういうことだよ！ あんたの腕ならやれたはずだろ!」

「おや、嬉しいことを言ってくれるねえ」

笑つて応じたレティシアだが、眼は笑っていない。

それどころか、毒蛇どくじやながらの眼の光だ。

がらりと、口調を変えて言う。

「差し合いで殺れる相手なら、とつくにやつてる。たとえそれが相打ちでもだ。俺はそんな骨惜しみはしねえよ。お前の言うとおり、それが俺の仕事だ。だが、あいつだけは一筋縄ではいかねえ。この俺が差し違えるつもりでかかってても、確実にやれる保証はねえ。だからこそ、お前たちを集めたんだろうが。いいか。あんまり馬鹿なこと言つてると、今度は本当に、あの化けもんに食わせるぞ」

いつものふざけた口調とはまったく違う。何とも言えない凄すごみのこもった、低い声だ。

スキヤップは骨まで締め上げられるような感覚に襲われた。本当に息が苦しくなった。

それだけではない。この感じ、皮膚がちりちりと逆立つような気配には覚えがある。あのときの王妃から感じたものと、そっくり同じだ。

大きく喘あえいだスキヤップの膝ひざが震えだした。

椅子に座っていなければ腰を抜かしていたに違いない。自分とはまったく異質のもの、自分の理解を遙かに超えるもの、いつ襲いかかってくるかわからない危険なもの、目と鼻の先に我が身を置いている、本能的な恐怖からだった。

蒼白な顔をうつむけ、じつとりと汗を掻いている後輩を無視して、ミンスがレイシアに話しかけた。
「確実ではないと言うが、お前と王妃の技倆はほぼ互角と考えてもいいのか」

「ああ」

「それなら、王妃にわずかな隙さえあれば、お前は目的を達成できるのか」

「一瞬でいいんだ」

フアロット一族一の精鋭は、まだ異様な光を眼にたたえたまま、低く呟ささやいた。

「ほんの一瞬でいい。あいつの集中力、注意力、戦闘能力、それらを削そぐことができれば何でもい。俺が欲しいのは、あいつを確実にやることのできる、

その『間』なんだ」

あの雪原での戦い、王妃が罫に足を取られたあのときこそ、その絶好の『間』だったはずだった。

いくら腕達者の王妃でも、片足が利かない状態で、レティシアの刃を躲すことなど、できはしない。

レティシアが頭を絞り、対応を考え抜き、季節を待った末にこしらえたあの『舞台』は確かに効果を発揮したのだ。

狼が飛び出してこなければ、勝敗は決していたはずだった。が、それは言い訳にしかない。

ジョスランが言った。

「では、我々は我々の仕事をするとしよう」

ミンスが領いて、言葉が続けた。

「我々はレティシアを切り札とし、王妃の力を削ぐことに全力を注ぎ、無傷のレティシアを王妃の前に通すことを最優先とする。異存はないな？」

ジョスラン、ガスパー、そしてヴァンツァーは無言で頷いた。それもまた舞台づくりの一環である。

スキヤップでさえ、蒼白な顔をしながらも、その眼はミンスの言葉に頷いていたのである。

レティシアが命を捨てる覚悟をしているのなら、いい。自分だけが生き残るつもりはない。

彼らは皆、そういう教育を受けた者達だった。

任務を不成功に終わらせることはできないのだ。

たとえ、命を落とすことになってもである。

また、標的を仕損じて生き残ったところで、その命をもって『責任をとらされる』のは明らかだった。

深刻な様子で議論をしている部屋の外では、もう一つの会合が開かれていた。

場所は、広い庭でも一番太い樫かしの木の上である。

「おもしろいことになってきたのう」

禿頭とくとうに長い顎髭あごひげを垂らした老人が楽しげに呟いた。座禅を組んだ姿だが、枝に腰を下ろしているわけではない。その上に漂うように浮いている。

老人を挟んで、宙に浮いているのは、ブラシアの屋敷に現れ、王妃にシエラのことを頼んだ二人だ。



長身の老婆と、神官姿の少年である。

老婆が含み笑いを洩らした。

あのとときの囁れた声とは似ても似つかない。艶めかしい、若い女の声だ。

見る間に老婆の姿は消え、長い黒髪をなびかせた、肉感的な女の姿が現れる。

「確かにもしろい。またとない見物でしょうな。

近くで見物できないのが残念なくらいです」

変身を遂げたモイラは言い、神官姿の少年が肩をすくめた。

「女じゃねえんだから、だって。呼んでくれれば、いつでも会いに行つてあげるのに、冷たいの」

これもあのとときは違う。少女の声だ。

重たげな衣装が、ばさりと脱ぎ捨てられる。

そう見えただけで、実際には姿そのものが崩れて消えた。後に残ったのは幼さの残る少女の顔だ。

おかつぱの金髪はやわらかい波形にうねり、青い眼は明るく輝いている。愛らしい少女だった。

ただし、モイラが下半身を持たないように、この少女は首から下の部分を持っていなかった。金髪の頭部だけで宙に浮き、くるくると表情を変えながら、楽しげに話している。

「おもしろい見物はいいけど、レティーが勝つたらどうなるの。あの王妃が私たちの仲間に入るの？」

「無理じゃな」

禿頭の老人の口調は厳かなくらいだった。

「あの王妃は、どう姿を変えようと太陽のままじゃ。その太陽がこんなところで落ちてみよ。我々とて、ただではすまんぞ」

モイラも小さくため息をついた。

「となると、王妃に勝つてもらうしかありませんな。

我々も手を貸しますか？」

「だめよ。そんなの。不公平だわ」

首だけの少女が口をとがらせる。

そんな少女をモイラがからかった。

「おかしなことを言う。ジューデイスは一日も早く

レティシアに死んでほしいのだろうか？ それなら、王妃の味方をしてやればよいではないか」

「だって、そんなことしたら、レティーがこっちに来たときに怒られるもの。第一、味方をしたくても、あんなの、怖くて近づけないじゃない」

老人が、ほう、ほう、と鼻ひなすうのように笑った。

「さよう。我々は結局、傍観者にすぎんのじゃよ。できるのは成り行きを見届けることだけじゃ」

すでに人ならぬ身と化した三人は、申し合わせたように押し黙った。

眼下で練り広げられていた会議も、一応の決着が付いたらしい。皆、席を立ち、明かりも消された。

すっかり肌寒くなった夜の庭を、下弦の月が頼りなく照らしている。

その空を樂しげに見上げながら、モイラが言った。

「月が月であることに気づくのはいつでしょうな」

「もうじきじゃろ」

「長い役目もようやく終わりますな」

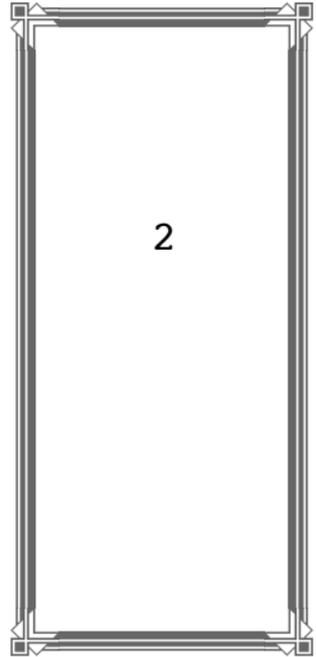
「ああ、もうじきじゃ」

主人に用事を言いつけられた小者が一人、手燭てしよくを持って二階の回廊を歩いていく。

その途中、櫛くしの木のすぐ近くを通りかかった。

何か気配を感じたのか、小者はふと顔を上げて、黒々と枝葉を広げている大木を見やったが、無論、何もあるはずがない。

そこにはただ、梢こずえが揺れているだけだった。



2

ラモナ騎士団長とエンドーヴァー子爵未亡人との話し合いは、実に二時間に及んでいた。

相思相愛の二人のはずなのだが、互いの気持ちに反して、話はさっぱり進展しなかった。

夫人はもう、愛するものを失うのはまっぴらだと考えている。一度だけでも辛すぎる経験だったのに、この上、三人目に夫として愛した人を亡くすことになったら耐えられないと感じている。

また、ナシアスはそんな夫人の気持ち痛みほど

わかるときている。しかも、ナシアス自身、最初の妻との無惨な別れに大きな打撃を受けている。

双方、この人を失いたくはない、離れたくないと思っ
ていながら、どうしても決定的なところまでは歩み寄れなかった。

「とりあえず、今すぐの出国だけは思いとどまってください」

ナシアスはどうにかこの一事だけは夫人の了解を取り付けることに成功し、ひとまず客間を後にした。

飲み物を頼むためだ。

延々と続く会談の間、誰も、茶の一杯も運んでこないということは、接近禁止令が出ているのだろう。しかし、廊下に出ると、ナシアスにとってはたいへんいやなものが、仁王立ちに立ちはだかっていた。バル口である。

「貴様、いったい何を考えている？」

じろりと睨まれて、さしものラモナ騎士団長も、とっさに声が出なかった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。